淫辱学園剣姫
穢される誇りと絆
小説 愛枝直
挿絵 群青ピズ
立ち読み版

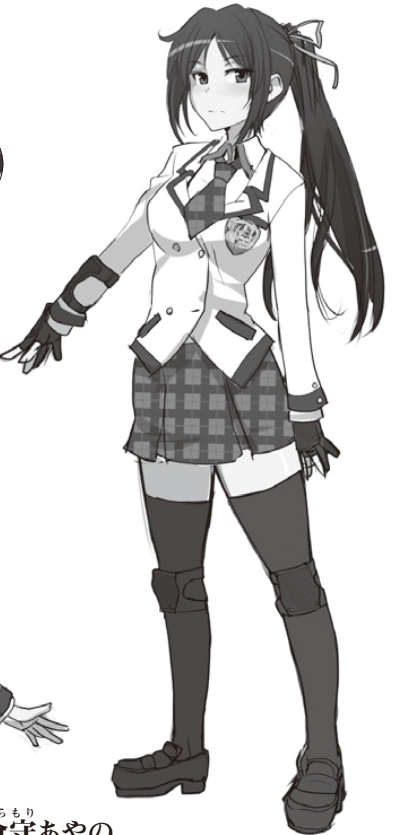
プロローグ　彼女の幸福論　006
一章　前夜の死闘　014
二章　血ニ墜ツ白刃　039
三章　突きつけられた現実　065
四章　『尻』　092
五章　変わりゆく私、変わり果てた彼女　134
六章　砕ケル白刃　173
七章　帰れない二人　and another one bites the dust　219

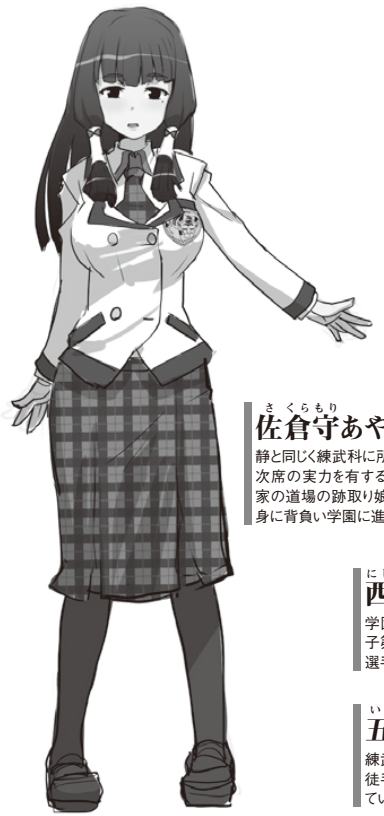
登場人物紹介

Characters

御門（みかど） 静（しずか）

「白刃」の選手を育成する練武科・女子筆頭の剣士。幼い頃よりあやのの生家である道場に通い、時には倒れる程の鍛錬を重ね、既にプロ級の実力を有している。





佐倉守（さくらもり）あやの

静と同じく練武科に所属する柔術使いで、次席の実力を有する静の幼馴染み。生家の道場の跡取り娘でもあり、期待を一身に背負い学園に進学した。

西久世（にしくぜ）ダリア

学園理事の娘で、高慢な性格の練武科・女子第三位。名声と称賛を浴びる為に「白刃」選手を目指す、レイピア&マンゴーシュ使い。

五十嵐濤吾（いがらしとうご）

練武科・男子筆頭。「白刃」において不利な徒手格闘使いながら、すでにプロとして参戦している実力者。強い者と戦うことが生きがい。

まるで、テレビの虚像に物を投げつけたかのような手ごたえの無さだった。
第一、この状況で柔和な笑みを浮かべているというのがおかしい。あやのにあんな顔をさせ、自分をいやらしく拘束しておきながら、男の視線には一切のげびた欲望を感じない。悪趣味な緊縛法とまるでちぐはぐだ。
多分あれは、感情そのものが存在しないのをごまかすための微笑だ。まるで蛆虫を詰めた革袋が人のふりをしているような生理的な嫌悪を感じる。
「気色の悪い世辞を抜かすな。お前は、なんだ？」
思わず口にした問いを、心の底から後悔した。この男の事を、何一つ知りたくなかった。記憶に割いた容量分、脳が汚染される気さえする。
「ご主人様だよっ」
勢い込んで答えたのはあやのだった。さっきまでの夢遊病じみた定まらなさから一転、身を乗り出して宝物を自慢する子供のように目を輝かせている。
「こら、勝手に答えちゃだめじゃないか」
家畜を手綱で御すように、鎖がじゃりと鳴らされる。あやのはただそれだけで顔を青ざめさせた。
「――！　ごめんなさい……ご主人様ごめんなさいっごめんなさいっ！」
すがるように男の袖を握り、目に涙まで浮かべて必死で許しを請う。

ぞっとした。こんな幼馴染みは見たことがない。いや、あやのでなくとも、こんな極端から極端へ反応が飛ぶのは絶対に普通じゃない。
「あやのに何をした……っ！」
「僕は何も？　傷つくなぁ。悪い事みんな僕のせいって口ぶりも、僕の事から話題が逸れて、ほっとしたみたいな顔も」
「っ！」
（なんなんだこいつは！）
無意識の反応を掬い上げられ動揺してしまう。身を縛める縄がギシリと鳴り、女武芸者の狼狽振りを暴露した。
「何が目的だ」
落ち着け、弱みを見せたこと自体で平衡を崩すなど愚の骨頂。感情の揺らぎを怒りで塗り込める。少女小説に紛れ込んだホラーシーンを読み飛ばすように、端的に尋ねた。
「だから、僕は、何も？　僕はただの手伝いさ。あやのちゃんのね」
「すまんがもう一度言ってくれるか？　この馬鹿げた茶番の主謀があやのなどという妄言が聞こえた気がしたのだが」
「大丈夫、それであってるよ」
「話にならんな」

応酬を重ねるごとに不快が募る。静は短く吐き捨てた。
「同感だね。あやのちゃん――」
狐目の男は張り付けた笑顔を僅かに困ったように調整すると、あやのの頭に手を乗せる。
「喋っていいよ？　お友達に直接説明してくれるかな？」
とたん、幼馴染みが極上の笑顔を浮かべた。いつも癒されてきた可憐な仕草が、向ける先がこの男であるというただそれだけで、酷く静を苛立たせる。
――これでは許可がなければ喋ることもできないと、あやのが受け入れているみたいなやり取りじゃないか。
「はい――ご主人様ぁ」
荒れ狂う静の心の内にも気付かず、蕩けきった声で返事をすると、あやのはこちらに向き直る。
「ごめんねしーちゃん。ほんとなの。ご主人様の言ってること、全部。しーちゃんにね、本当のわたしを知ってほしかったの。わたし、変態さんなの。いましーちゃんがされてるみたいにご主人様に縛られて、気持ちよくなっちゃう変態さんなの――っ」
始めのうちは、悲しげに大きな瞳を潤ませていた。だが、言葉を紡ぐごとに口調は速まり、陶然と頬が紅潮していく。
「何を言っている。全く説明になっていない。正気に戻れ、あやの」

めまぐるしく移り変わる表情にも、語られるあまりにも刺激的な内容にも、艶ごとに慣れない剣術少女はとてもついていけない。

たじろぐ静に、あやのは据わった目で決定的な言葉を口にした。

「正気だもん。わたしは全然普通だよ。あのね、しーちゃん……わたし、佐倉守流が、武術が、嫌いだったの」

あやのは静の強さの原点だ。

あやのと一緒の時間を過ごすためだけに通い出した道場で静は剣に魅せられた。

身体が大きくて怖かったあやののお父さんは、静にはとても優しかった。二人で相談して、稽古の楽しくなさそうなあやのに桜色の袴を贈ったりもした。

毎日道場に通った。無我夢中で剣を振った。倒れるほど鍛錬する癖が抜けなくて、不撓館では何度もオーバーワークを警告された。

静の強さは、ごく普通の女の子が積み重ねた修練の末手に入れたダイヤモンドだ。

柱に縛りつけられたシュールな有り様で、その原点に決別を告げられ、小揺るぎもしないような強靭さなど持ちあわせてはいない。

気を落ち着かせるように大きく息をつく。

「そうか。うすうすそうじゃないかとは思っていた。だが、今この状況とその話に何の関係がある？」
酷く平板な声が出た。あやのは一瞬ぐっと言葉に詰まる。瞳に宿った熱狂が僅かに冷めた。それでもどこか思いつめた様子は変わらない。
同じように大きく深呼吸すると、手に持つ刀をぎゅっと握り、抑えた調子で語り出す。
「しーちゃん。わたしね、武術が嫌い。ただの上手な人の傷つけ方としか思えないの。お父さんは佐倉守流を活人の術、身を修めて、大切な人を護るための技って言ってた。わたしもそうなんだって、自分に言い聞かせようとしたよ。けど、どうしてもだめだったの」
真剣で何度も切りつけられるのとどちらが痛いだろう。緊縛された静は、ただ聴いていることしかできない。締め付けるような頭の痛みは脳震盪（のうしんとう）の後遺症か、受け入れられない心が悲鳴を上げているのか。
差し水で凪いだ熱水が再び沸騰していくように、あやのの口調がまた速くなっていく。
「それよりもっと、自分のことが嫌いだった。武術が嫌いなクセに、しーちゃんに、お父さん達に、嫌われるのが怖くて、がっかりされるのが怖くて、やりたくないよって言えなかった意気地無しの自分がだいっ嫌い。嫌いなクセにやめられなくて人の壊し方ばっかり上手になって……わたし、今では何も考えなくても人の骨を折れるんだよ」
「あやの、落ち着け。全く話が見えない」

たまらず静は遮った。
悔恨が心を満たす。
――剣を忌んでいると、気付いていたじゃないか。なぜそこから、想像を進めなかった。本当はその答えもわかっている。静は、武芸者としてのあやのを失いたくなかった。共に『白刃』の選手となり、変わらず切磋琢磨する未来が惜しくて、気付かないふりをしたのだ。お前が私を縛っていたのだと、そんな台詞を言わせてしまったことが悲しくて仕方がなかった。
親友は止まらない。いつものおっとり声からは想像もできないような、激しいのに抑揚がない奇妙な喋り方でまくし立てる。
「最後まで聞いて、しーちゃん。ご主人様はね、わたしが悩んでることに気付いてくれたの。話す前から全部わかって言い当ててくれたの。それで、縛ってみようって、戦えなくなった自分を知ってみようって……ご主人様に縛ってもらうとね、武術がなんにも使えなくなるの。佐倉守の跡取りの自分から自由になれるの。叩かれたって蹴られたってなんにも抵抗できないの。そう思うとわたしカラダが熱くなって……おなかの奥がきゅうってなって……頭がおかしくなっちゃうの。変態さんになっちゃうのっ」
思いのたけをぶちまけきった後、あやのは内股気味の膝から身体を震わせた。少女としての潔癖な部分が、理屈抜きに許せないと思ってしまうような震え方だった。

頭の芯が凍るように醒めていく。幼馴染みの話は、彼女がご主人様と呼ぶ男が登場したとたんぐにゃりと歪み、支離滅裂に堕した。

――結局、この男が悩むあやのに取り入って、妙な性癖を植え付けたということだ。

「……わかった。理解できるとは言えんが、あやのの考えはわかった。趣味についてはとやかく言わん。武術をやめたいと言うならお師様に一緒に頭を下げてやる。だが――」

「ほんとっしーちゃんっ！　じゃあ――」

この男はダメだ。そう続けるつもりだった静を、あやのが目を輝かせて遮る。

「しーちゃんも一緒にご主人様に調教してもらお？」

――これは本当にあやのか？　正気とは思えない言葉が、今更な疑問を抱かせた。

「待て、あやの。何を言っている。そんなこと私には必要ないっ！」

色をなして叫ぶ静に、あやのは淫蕩の浮かんだ笑みで答える。

「しーちゃんわたしね、大好きなしーちゃんが、大嫌いな刀を握るのも、本当は嫌だったの。お昼にしーちゃん、わたしを元気づけようとしてくれたよね。あのとき決めたの。こんな優しい女の子に人殺しの道具なんてもう持たせちゃいけないって」

「私は……あやのが武を捨てた後も親友でいたいと思っていた。あやのは違うのか？」

いくらあやのでも、言ってはいけない台詞がある。強烈な怒りと、そんな感情を幼馴染みに覚えたことへの悲しみに、震える声で剣士は告げる。
「違わないよ。わたしとしーちゃんはずっとお友達。ずっと一緒だよ。だから、教えてあげたいの。知ってる？　本当の自分って、すっごく気持ちいいんだよ？」
言葉が、届かない。まるで二人を引き裂くように、狐目の男が割り込んだ。
「それじゃああやのちゃん、刀を貸して。次の用意をしてきてくれるかな？」
「はいっご主人様」
命令されるのが嬉しくてたまらないといった様子で、あやのが刀を渡す。再び静に向き直り、顎の下で両手をあわせて小首を傾げた可憐な仕草で微笑んだ。
「しーちゃん、怖がらなくても大丈夫。たくさん泣いちゃうと思うけど、絶対に幸せになれるから。ご主人様はしーちゃんのこともわかってくれてるの。わたしが西久世さんに負けてからしーちゃんがここに来るまで、全部ご主人様の言う通りだったんだもの」
衝撃的な一言を残し、ふらふらと頼りない足取りで、扉の向こうへ消えた。

そして静は一人、悪魔と共に残される。
手も足も出ない状況で、この蟲のような男と二人きりだという事実が心拍数を上げる。
（何をするつもりだ。次とは何のことだ）

馴染みの刀も持つ者が違えば、あやのの言うとおりただの人殺しの道具だ。
唯一の救いは――。
「一応言っておくけど、僕のは捕縄術じゃないから。素人に負けるわけじゃないなんて屁理屈はただの勘違いだよ」
「～～～～～ッ！」
心の内をぴたりと言い当てられ、顔を赤くして睨み付ける。
「それに、殺したりはしないから安心して欲しいな。さっきも言ったじゃないか。僕はただの手伝い。あやのちゃんは君に死んで欲しいなんてこれっぽっちも思ってない」
カツカツと靴音が近づいてくる。狐目の男は刀を脇に抱えなおした。言葉に反してカッターナイフを取り出し、キチキチと刃を出す。箱の置かれた台を迂回して目の前に立つと、制服のプリーツスカートの中に手を差し込んだ。
「い…！　触るな！」
人間大の爬虫類に触られてもここまでの不快はないだろう。悲鳴を飲み込み一喝するが、男は全く動じない。ショーツの端を掴んで伸ばすと、ナイフを当てた。
黒布はぷちんと切れ、剣士の秘奥が晒される。
紅潮が耳にまで達した。
成熟した肢体に見合う、形よい茂みと、左右対称に肉襞の開いた陰唇が露わになった。

縄の圧迫で擬似的に発情した呼吸を強制されたせいか、粘膜口はうっすらと濡れている。
「み……見るな！　見るなぁ！」
肌が傷むとわかっていても、必死で身体をよじる。細腰がくねり、図らずも牝芯が煽情的に振り立てられる様を披露してしまう。
当然のように縄は余計に締まって喰い込むだけで、ほどける気配など全くなかった。
（犯されるのか……？　こんな男に私の初めてが……！）
狐目は、学年筆頭の少女そのものを見ても、無感情な笑顔を崩さない。
「君に優しい女の子になって欲しいだけだよ。刀を見ただけで怖がって泣き出すようなね」
怯える静の想像は、最悪な形で裏切られた。ただ犯すだけならかさばる凶器など邪魔でしかない。その意味が、明かされる。止める間もなく刀の柄が、ズグリと聖域へねじ込まれた。
「いぎ……ぁぁぁああっ!?」
（嘘…嘘嘘嘘！　え……なんで？　私の初めて、なんでこんな）
ありえない。こんなことはありえないきっと幻覚だ。五十嵐に意識を狩られた後遺症の頭痛が幻を見せているのだそうに違いない。
夢だと思いたかった。だが、下腹に走るこれまで感じたことのない激痛が、静を逃避か

ら引きずりもどす。硬い感触が処女地を荒らす。巻かれた布が摩擦を増して、与える痛みを耐えがたいものに変える。

（嫌……嫌だ……！　巻き戻してくれ！　誰か時間を巻き戻してくれ！）

願いに応える者は、どこにもいない。いたとして、どこからやり直せばよかったのか。

こんなはずじゃなかった。いつか自分よりも強い男と恋に落ち、ウェディングドレスで初めての夜を過ごす。誰にも語ったことのない少女小説じみた未来は、永遠に失われた。

静の初めては、直径二十五ミリ強の木の棒で散らされたのだ。

処女膜が裂け、痛めつけられた媚肉から漏れ出る出血が鍔を濡らす。鉄錆色が滴り落ちて、喪失の事実を改めて突きつけた。

「殺す……！　殺してやる！　絶対に殺してやるッ！」

剣士は猛々しく吠える。だが、無理矢理はめた強さの仮面はほころびて、裸の静が涙となって瞳に浮かんだ。

痛々しい剣姫の強がりにも、狐目の男には寸分の感情の揺らぎもない。張り付けた笑みには、嗜虐や優越感さえ浮かんでいなかった。

「まったくあやのちゃんの言う通りだ。君たち武芸者という奴は何かあれば〝死にたいのか〟、〝殺してやる〟。野蛮極まりないね。わかっているかい？　殺すってことは二度と戻らないってことだ。君の処女のように。本当にその覚悟があるのかい？」

一日中直腸内に収まっていた拡張プラグが、ぶぽんと下品な音を立て、勢いよく抜けた。
真後ろに飛んだ黒い塊が、床に叩きつけられバウンドし、ドス、ドンドンと重たい音を立てる。
男達の爆笑が部屋を満たした。
「オイ、飛んだな！　世界記録でも狙うつもりか！」
「笑いごとじゃねっスよ！　もう少しでケツに挿れてたもんが直撃だったんスから！」
大騒ぎする声を聞きながら、静は必死で拳を握り、眉根を寄せて、涙をこらえた。
「う……うう……」
（泣くもんか……こんなことで……こんな奴らのせいで……！）
不撓館女子筆頭が誓うには、あまりに幼い決意。だが、それすら打ち崩すように男達は陵辱をエスカレートさせる。
「まずは俺からな」
拡張具をひり出して、がくがくと膝を笑わせる静に、先ほどから態度の大きい男が近づく。
ジーと、ファスナーを下げる音がした。視界を奪われた少女には、筋骨隆々の偉丈夫が、腹につくほどそそり立った陰茎を取り出したことを知るすべはない。
「へへ、いやらしくヒクついてやがる。これが欲しいんだろうが！」

男は添え置かれていたローションを、自らの分身に塗りたくる。
ねとついた手のひらが双臀に触れた。気色の悪さに怖気が走る。
尻たぶが親指でむにゅと割り開かれる。男がてらてらと凶悪に濡れ輝く雁首を、尻穴にあてがった。
「んんぅうう――――っ！」
焼け火箸を当てられたような灼熱感に、怯えて静は悲鳴を上げる。
「あ、あめ……ォオオオ！」
挿入は異様な感触を覚えた直後のことだった。パンパンに張り詰めて、えらの張った亀頭が肛環を抜け、鉄のような硬竿がぐぶぐぶと排泄器官を逆行する。
プラグより更に太く長い凶器が直腸をみっちりと埋めた。
（嫌……いやだ……！　お…男の物が……私の中に……！）
長時間の拡張で筋肉は伸びきり、潤滑液の品質も相まって痛みはない。強烈な圧迫感と生理的嫌悪を、静は眼を見開いて耐える。
男がゆっくりと腰を引く。粘膜口を僅かに引き摺り出しながら、亀頭が露出する寸前までペニスを抜くと、再び最奥へ突き込んだ。
「んォオ！」
苦悶の声に構いもせず、また引き抜き、ねじ込む。前後運動は加速度を増し、腐肉が連

続して肛門粘膜を擦り始めた。
「んうぅ……う、ぅうぅ……っ」
S字結腸までたどり着く、長大な肉杭がぐぼぐぼとアナルを抉った。
親友の舌と手で、性感の扉をこじ開けられた内臓は、強姦行為に望まぬ疼きを溜め込み始める。
静は口枷を噛むようにして、マグマのような感情を押し殺した。
「……なんか反応うすくねーですか？　いつもの『尻』ならとっくにガン泣きしてアクメ極めてんですけど」
「穴ん中もちょっとかてーな。こなれ方が足りん。肉付きも前のほうがむっちりしてよかったなぁ」
「でも脚はこいつのほうが長いっスよ」
苛立ったように尻たぶをぱんぱんと腰骨で叩きながら、勝手な評論を宣(のたま)う。
こんなところでも女としてあやのと比べられるということが、静の心を暗く落ち込ませた。
貶(けな)すだけ貶しておきながら、男の一物は限界まで怒張したままだ。
ピストンの激しさは箱の中で、首と腰の枷が擦れるほどで、静は必死で声と涙を堪える。
（泣かない……絶対……こんな奴らに負けたくない……！）

負けない、負けないと、何度も口の中で呟きながら、名前も知らない男にじゅぶぐぶぐぼぐぼと淫らな水音を立てて、排泄孔を陵辱される。

無反応を決め込む代償に、感覚は陽根の形を覚えてしまいそうなほど、掻き回される交接部に集中した。

逞しくえらの張ったカリ高の剛直が、腸壁内を掻き回すごとに、妖しい疼きが下腹を苛む。

ふーっ、ふーっと荒い鼻息を漏らして堪えているのが、悔しさなのか怒りなのか、それとも淫楽か、だんだんと自分でもわからなくなっていった。

「なんだこいつ、我慢してんのか。つまんねぇなぁ……もういいや」

突如男が抽送のペースを更に上げた。

短く細かい抽送が、自慰のようにただ射精欲を高めるための動きなどと、初心な少女が知るはずもない。

（なんだ……なんでそんなに乱暴に……！）

わけもわからぬまま怯える静のアナルに、ひと際強く腰をせり出し男が雄竿をねじ込み――。

どく、どぷ、びゅぶ！　と、おざなりに精を垂れ流した。

「んんー！」

（あ……熱い……！　い、嫌だ…出すな！　そんな汚い物を……！）
びくびくと砲身が暴れ、熱い子種汁をどろどろと腸管に無駄打ちする。
通り一遍の保健や噂話の知識では知りえなかった、内臓が腐り落ちるかと錯覚するほどの汚辱感が静を打ちのめす。
どれほど手ひどい敗北にも、これほどのショックを受けた覚えはない。人生のすべてを踏みにじられた気さえした。
「あー、いいぞ、お前ら。俺もう出したから。後は好きにしろ」
「い…うぅン！」
やがて、一滴残らず獣欲をぶちまけきって、にゅぶんと媚腔から肉棒を引き抜かれる。
身体も心も凍りついたように固まっていたはずなのに、極太の与える拡張感から解放されると、甘い衝撃が駆け巡る。
立ち直るイメージが持てないほどの、圧倒的な敗北感が静を襲った。
「うう…ひっ……ひぅ……ああー……っ……あ、あ、あああーっ」
静は、号泣した。暗く狭い覆いの中で一人、ぽろぽろぽろぽろ涙をこぼす。大粒の滴が頬を伝ってすでに涎まみれのタオルに滴り落ちた。
「だったら次俺にやらせてくださいよ。俺こういう生意気につり上がったケツが超好きなんスよ」

「好きにしろって」
哀切な少女の咽び声も、男達にとっては嗜虐をかき立てる材料でしかない。
半ば開いたままの菊門に、先ほど静を叩きまくった男がぐぶぐぶとペニスをねじ込む。
そのまま手加減無しに出し入れを始めた。
「へへ、モデルみたいな脚しやがって！」
「あおおー！　あおおあ――っ！」
口の端から汚らしく涎がこぼれ、狐目が敷いたタオルをべとべとに汚す。
白濁と潤滑液でどろどろにほぐれきった媚肉は、誰にも明らかなほど肉棒に満たされることを悦んだ。
暴力的な淫楽が蜜穴を掻き崩すごとに、ビクンビクンと全身がよがり震える。
「とろとろにこなれてやがる。もう完全なマンコ穴だな」
卑猥な台詞を投げつけて、男は具合のよさを堪能するようにペニスを様々に蠢かした。
ぐりぐりと8の字に腰をグラインドされ、括約筋をねじり広げられる。
亀頭を肉壁に押しつけられ、磨くように擦られる。
じらすようにずるずると陰茎を引き抜いては尻たぶがぱぁんと鳴るほど最奥まで打ち込まれる。
どれも全部気持ちよかった。そして結局、指が食い込むほど腰を掴まれ、ぐちゃぐちゃ

と乱暴に肉穴をほじり回されるのが一番気持ちよかった。
手ひどく扱われるほど興奮が増すという事実は、静を取り乱させた。
「おおやぁおあー！　やぁおおおー！　もおやおおーっ！」
意地も誇りもかなぐり捨てて、剣士の少女は泣き叫ぶ。だが、それすら壊れた身体を増感させる。
声を絞り出すごとに、裏の媚肉がぐじゅりと雄棒に絡みつき、摩擦係数が高まる。悦びに全身がわなないて、気が狂いそうなほどの淫悦が襲ってくる。
どうしてこんなことになったんだろう。
私はこんな酷い目に遭わなければならないほど、何か悪いことをしただろうか。
「女の泣き喚く声はいつ聴いても癒されるわぁ。昼間はつまんねぇもん見せられたからな」
「あー、御門っしょ？」
「俺はよー、ああいう大して強くもねーくせに、調子くれた真似する奴が一番きれーなんだよ」
疑問の答えは、思わぬところから返ってきた。
（なんだ……私が悪いんだ）
自分は強いとうぬ惚れて、あやのを正気に戻すと息巻いて、結果は男にのしかかられてよがり鳴いている。しかも尻穴を犯されてだ。

ついでとばかりにたれさがったおっぱいまでべちんべちんとスナップを利かせて叩かれました。起きた瞬間から頭がおかしくなりそうなぐらい気持ちよくさせられて、もう何が何だかわかりません。

ずぼずぼ、ごりごり、ばちんばちん。ぐちゅぐちゅ、ごちごち、べちんべちん。

男の人たちはたくさんいるので、腕が疲れたら交代でかわりばんこにわたしを虐めます。おしおきはいつまでたっても終わらずに、ずっとアクメし続けます。

みんなわたしのみっともない姿を見て、げらげら笑ってくれています。

ご主人様に捨てられた寂しい野良マゾを、たくさん虐めて慰めてくれる優しいみなさんが大好きです。

「――がになりゅぅううっ！　これいじょうアクメガマンしたらしーちゃんあたまがおまんこになるよぉっ！」

しーちゃんもとっても気持ちよさそうです。

途切れることのないあやのの絶叫を聞きながら、静も男に組み敷かれている。

縛られていないこと以外は、幼馴染みと同じお尻を高く掲げた四つん這い。真っ直ぐに下ろした艶髪が、ピストンにあわせてさらさらと揺れる。

狐目の消えた調教室で、入れ替わり立ち替わり毎日輪姦されている。もう、どれだけの

時間が経ったのかも分からない。
もはや定番のメイド風ボンデージ衣装に、気恥ずかしさを感じることはなくなった。しかし、今度はトレーニングをやめ身体がまろみを増してきたせいで、あちこち窮屈な感じがする。
特に胸回りは明らかに足りておらず、犯されて揺すぶられるとすぐに乳房が顔を出す。
今も二つの肉果が直にマットレスに押しつけられて、ぐにゅぐにゅと絶え間なく形を変えている。先端を飾る奴隷の証が、じんじんと疼いて性感を底上げした。
背中にのしかかった男は、ハンマーを振り下ろすように何度も何度も尻穴をペニスで穿つ。
「ひぅ！　うっ…うぅーっ……うぁああ……あひぃいいんっ！　ふひっ…ひぃいんっ！　きっききもぢいぃいいいんっ！　いひぃいいいいいんっ！」
見開いた瞳からぽろぽろと涙をこぼしながら静は甘鳴く。声は多量の艶を伴って高域で響いた。かつての凛と鋭い声は、気付かぬうちに無理に低く抑え込んでいたからだと、性奴になって初めて知った。
今日の趣向は、あやのをひたすら絶頂させ続け、その身悶え泣き喚くさまをオカズに、静の肉穴で抜くというものだ。
尻たぶと内腿にはそれぞれ正の字が並べられている。雄を射精に導いて、締まりの良さ

を褒めてもらうと、身体を鍛えてきたことも無駄ではなかったと思えた。
腸汁と潤滑液と精液でぬるつく菊壺をずぼずぼと乱暴に犯される。
プラグで拡張される代わりに、毎日毎日何本ものペニスが、本番行為で肛門を造り替えていった。
粘膜壁はほぐされてとろとろに蕩けている。過剰に圧を与えがちな括約筋周りは、特に丹念にこじり広げられた。
今では肉層のクッションができて盛り上がり、円形の陰唇とでもいうような、卑猥な肉ビラが出来上がってしまっている。
静自身、先に雄を覚えたこともあって、膣を犯されるより尻穴を使われるほうが好きだった。
完全に性器と化した元排泄孔を、犬のように這い蹲ってぶじゅぶじゅとほじられていると、まるで自分が本当にオナホールになってしまったような気がした。
あやのは『けど』や、『のに』じゃないと言う。惨めで、辛くて、恥ずかしい『から』気持ちいいんだと。今ではその言葉の意味を心の底から理解できた。
洗腸をして犯される準備をしていると、自分がどうしようもない変態に思えて、寝台のシーツがぐしょぐしょに染みるほど愛蜜がわき出る。
乱暴に一方的に、獣欲を満たす『モノ』としていたぶられると、頭の中がぐらぐらと煮

え立つような興奮に襲われる。
抵抗するどころか、はしたない嬌声を上げてよがり乱れ、雄棒を肉穴でしごき立てていると、牝の実感が心を満たす。とてもとても幸せな気持ちになれる。
「いひぃっ！　イきたぁいっ……イぎたいよぉおっ！」
顔の横に置いた拳を握りしめ、静は必死でオルガズムを堪える。
ふーっ、ふーっと発情した牝犬のような吐息が絶え間なく漏れ、額には汗が浮かんで頬は赤く上気する。
抑えきれない愛悦に、突き出した腰が振り立てられる。その動きでねちゃ、ぐちとまた尻性器がこじられて、余計に昂っていく。
「ダメダメ！　しーちゃんは今ケツオナホなんだから、先にイったらおかしいだろっ！」
「あーっ！　でも無理だもぉん！　こんなながくてかたいおちんぽでオナホあにゃズボズボされたらアクメガマンむりだもぉん！」
結腸を息ませたい。入り口を締め付けたい。粘膜のすべてを肉棒に絡みつけてアナルアクメを貪りたい。
だが、許可無しでの絶頂の後にはディルドを使った〝おしおき〟が待っている。
張り型にご主人様との思い出が詰まったあやのと違い、静にとって、淫具は自分の罪深さを思い起こさせる仕置きの道具でしかない。

生のペニスをハメてもらえず、一人寂しく絶頂させられることは、奉仕愛奴として耐えがたいことだった。
「うぅううーっ！　イきたぁい……イぎたぁあいっ！　ケツチンポぎゅーってしてあへぇって鳴いてイぎたいよぉおっ！」
必死で雄を煽ろうと、今ではあやのより上手になった淫語をまくし立てる。だが、卑猥な言葉を口にするほど思考は淫悦に煮えたぎる。
初めからこんなゲーム勝てるわけがないのだ。
掲げたお尻を振り立てることも、性処理穴を締め付けることも、淫らによがり喚くことさえ、男を射精に導く手段全部が、気持ちよさになって返ってくるのだから。
そして何より、今の静は雄に屈従するのが務めの性奴隷で、男が仕置きを与えたいと望んでいるなら、逆らうことなど許されない惨め極まりない生き物なのだ。
置かれた境遇に思いを馳せることにさえ被虐を煽られ、どうしようもなく絶頂の縁へ追い詰められていく。
「ほらっ、早くイかせたかったら便器穴もっと締めて！」
「らめぇ――っ！　アクメするもぉん！　けつあにゃきゅっきゅしたりゃしーちゃんぜったいアクメしちゃうのぉ！」
「すればいいじゃんか！　どうせほんとはハメてもらえるならチンポ模型だってなんだっ

正正丁
正正

ていいんだろっ!?」
あまりの言いぐさにずきんと胸が痛んだ。
お気に入りの服を着せられて、お気に入りの体位を取らされて、しかもあやのちゃんの気持ちよさそうなよがり鳴きを聴きながら、それでも一所懸命尻穴絶頂を我慢しているのはどうしてか、ちゃんとわかってほしかった。
「ちがうもぉん！　しーちゃんご奉仕奴隷のざぁめん絞り器だからあったかいおちんぽ気持ちよくしないとだめだもぉん！」
愛奴にだってそれぞれこだわりがあるのだ。
必死の抗弁に、男はなにか感じ入ったところのあるように「おぉ」と短く呟いた。
そして、静の手の甲に重ねた手を一つ離し――。
「そっかぁ。しーちゃんは可愛いなぁ」
頭に手を置きさわさわと撫でた。
幸せな感触にぞわぞわと全身が総毛立つ。胸の奥が切なくきゅんきゅんと疼き、圧倒的な心地よさが何もかもを決壊させる。
確かにポニーテールをやめて、髪を下ろすようにしたのは撫で心地をよくするためだ。
それでも、ギリギリでオルガを堪えているたった今、こんなことをされたら――。
「ずりゅいよぉおおっ！　いまなでなでされたりゃイきゅぅうっ！　いきゅぅううう

うううううううううっ！」

更にトーンを上げて絶叫し、こらえきれずにアクメした。

我慢に我慢を重ねていた分、その快楽は強烈だった。視界と思考が真っ白に染まり、制御をなくした女体がビクンビクンとわななく。

長い手足をたたんだ肢体を更に縮こめ、背中を突き上げるように丸める。膝から先が勝手に持ち上がり、足指がぎゅっと握り込まれる。

全身の力を使って、肛門性器で肉棒を締め付けた。

収縮が収まると、剛直を押し出そうとするかのように直腸が息み出す。にぢにぢにぢと水音を響かせ、腸液とローションに満たされた菊壺がうねりながら亀頭から茎根までをしゃぶりあげる。

尻穴に集めすぎた圧力が漏れ出して暴走する。桃尻がカクカクと痙攣して、結合性器の摩擦を貪った。

「あへっ…ぇぇぇぇぇっ！　あへぇーっ！　あへぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

顎を反らせてきつく眉根を寄せ、静は限界まで舌を突き出した、あられもないアクメ顔を晒す。淫猥極まる身体の反応に合わせ、奉仕奴隷はよがり鳴く。

肉穴を締め付けるごとに声を振り絞ると、凄まじいほどの激淫が更に深まった。

「おぉお絞られる！　しーちゃんのアクメアナホちんぽゴシゴシしごいてるよ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
奇数月
12日発売
フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!
コミックプリズム
2・6・10月
下旬発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
淫らに堕ちまくるヒロインがアンソロジー!
奇数月
中旬発売
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!